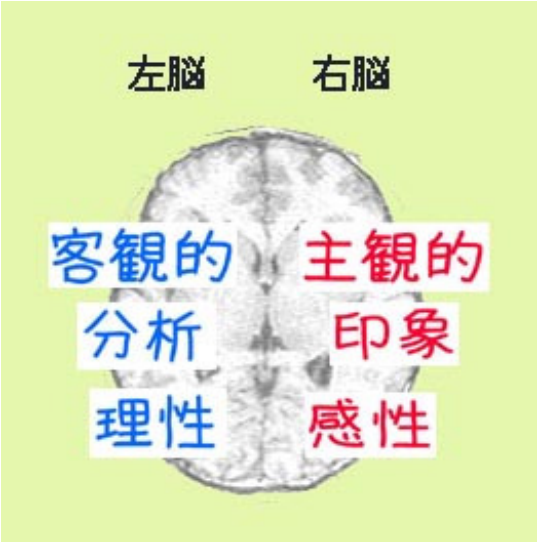
香楽（こうがく）の時間　・・・音を楽しむのが音楽、香りは香楽・・・

（3）香り表現

香りの勉強とは何をすることかといえば香りの表現力を身につけることだといってもいいくらいです。 そして香りを楽しむためにはこの表現力が不可欠です。 ある香水が好きか嫌いか、快か不快かはだれでもいえますが、どう好きか、どう不快かなどを言葉にするのは簡単ではありません。 香りそのものが表現なので香りを言葉で表現するのは無意味だという人もいます。 それも一理ありますが、その議論を今はしないことにしましょう。
とりあえず表現例をひとつ。
「・・・・ノンブル・ノワールの核となる花は薔薇とスミレの中間だが、どちらの甘さもまったくなく、背景には厳粛な、気高いといってもいいほどの葉巻箱のシーダーの香りがあった。 同時にそれは乾いたかおりではなく、液体に濡れてみずみずしくきらめき、深い色彩がステンドグラスのように輝いていた。 ノンブル・ノワールの声は年齢よりおとなびた子供の声のように、生き生きとしていると同時にハスキーで、抑揚があり、ほんの少し移り気だった。 そこには、故意によそおった無邪気さがあり、それがコレットの「クローディーヌ」シリーズの文体を連想させた。 ・・・・」 これはルカ・トゥリン著「香りの愉しみ、匂いの秘密」に記されていた表現です。

この例からもわかるように表現には大別して ①客観的表現と ②主観的表現、別の言葉では①香りの分析的表現 ②香りの印象表現の２種類があります。 近頃はやりの脳機能に照らして言えば、前者は左脳表現、後者は右脳表現とでもいいましょうか。図１

図１　右脳/左脳的香り表現



表現例の前半部分で香りの構成を描写している部分がありますがこれは①であり、後半の声、

さらには文体をイメージしている比喩描写は②にあたります。
②のイメージ表現は香りをかいで思い浮かぶことを言葉にすればいいので、ある意味だれにでもできますが香りの構成を述べるとなるとそうはいきません。 香りの素材や性質、そして香水構造などの知識が必要になります。 表現を読んだとき①と②ではどちらが読んだ人に正確につたわるのでしょうか？　当然①のほうが、客観的表現なので、香りを想像してもらうには便利ですが、その香りをどのように味わったかといった内容は②のほうが伝わるかもしれません。

香水は調香師の作品です。 それはアート作品というよりデザイン作品です。 アートが自分だけのものでいいのに対して、デザインは他人に共感されなくてはならないものだからです。香水がアートであってならないことはありませんが、通常、香りを介してイメージの共有を期待するので、調香師には、他人の頭で考えるという、デザインセンスが求められます。

作品の好き嫌い同様、作品の良し悪しもだれでもがいうことができます。
先ごろミシュランガイド東京が話題になりました。 科学ではないので、だれかが勝手に星をつけてもいいわけです。 しかし評価が多くの人に支持されるものであるためには料理という作品の良し悪しを判断する評価ポイントが明確で、それがだれもが納得するものでなければなりません。

香水のミシュランガイドみたいなものに「世界香水ガイド」があります。 先のルカ・トゥリンとタニア・サンチェスが評価をしているものですが彼の香り表現から評価のポイントを抽出してみました。表１
表１　ルカ・トゥリンの香水評価

創造性		高級感		調香技術	
評価	表現	評価	表現	評価	表現
○	時代を超えている	×	むかつく安っぽさ	○	複雑で多彩な調合
○	しっかりとした構想をもって全体を指揮	○	偉大でスケールが大きく、豊か	×	いたずらに複雑
×	よくあるパターンのごった煮	○	構造より質感がおもしろい	○	激しく打ち寄せる波のような主題
○	一貫した計画のもとにデザインされた	○	壮大なスケールで豪勢	○	豊かだがくすむこともない
○	着想から制作まで完璧になされた香水	×	変てこなケミカルの匂い	○	シンフォニーのような構造はとてもよい
×	百もあるそこらのものと見分けがつかない	×	安っぽくてけちくさい	○	アコードという言葉がぴったり
×	古臭いフゼア	×	限界にちかいくらい空っぽだ	×	あまりにもいろいろ乗せようとしすぎ
×	深みもオリジナリティーもない	○	透明感を犠牲にした重厚さ	×	うるさく、粗く、むきだしの感じ

創作料理と同じですね。 つまり、素材（香料）がよく、調理（調香技術）がうまく、そして独創性があることが高い評価を得るポイントなのです。